

第59回 鹿児島県児童生徒作文コンクール 特選

リサイクルの輪を広げたい

菱田小学校

5年

垣内 かきうち

清花 さやか

わたしは、日本一の町に生まれました。ごみのリサイクルりつ日本一が九年間も続いている大崎町、わたしのじまんのふるさとだ。

わたしは、小さいころから母に「清花、おかしのふくろは赤いふくろだよ。」

「おかしの箱はたたんでこっちにに入れて。」

と言われて育ってきた。だから、ごみの分別をするのは当たり前だと思っっている。今では、自分でごみの分別も分かりふくろに入れることができるようになった。迷った時には、適当に入れるのではなく、

「このごみはどのふくろに入れたらいいの。」

と母に聞いてから捨てるようにしている。

ごみの分別が当たり前だと思っていたわたしは、社会科で「ごみのしよ理と利用」について学習した。大崎町は焼きやくろをもっていないから、分別してリサイクルすることであるごみの量を減ら

していることが分かった。その種類は二十七こう目に分けられる。この二十七こう目には、町外の人

は家族全員ですぐにできることだ。日本は世界の中でもティッシュの消費量が多い国だとテレビで見

はびっくりするだろう。

わたしの家でも食事の時にティブルがよごれたら、ティッシュを使っ

て覚えてきた。給食で食べた後のムースのふたはプラスチックごみ、

「もう、ティッシュじゃなくて、台ふきを使いなさい。」

カップは紙ごみ、どちらもきれいに洗って乾かす。こうして集まったプラスチックごみや紙ごみは、

とおこったような顔で言う。少し

また新しい製品に生まれ変わるのだ。二十七こう目は多いと言う人もいるけれど、なれてしまえば、

全然気にならない。

ごみをへらすために、リサイクル

をすることをいいことだ。しかし、もっと大事なのは、ごみを出

さないことではないだろうか。

大崎町は町制施行八十周年。近年はインドネシアにごみの分別指

わたしの家では、ペットボトルのお茶をなるべく買わず、家で麦

茶を作って水とうに入れて出かけるようにしている。また、スーパー

などに買い物に行くときは、マイ

バッグを利用している。この二つ

(原文掲載)



▲垣内清花さんと押領司なおみ校長先生

11月10日(木)に開催された『第59回鹿児島県児童生徒作文コンクール』において、菱田小学校の5年生、垣内清花さんの作文『リサイクルの輪を広げたい』が特選に選ばれました。

垣内さんは、「作文で初めて特選に選ばれてうれしかったです。日本一を取り続けることは本当にすごいことで、私の自慢の町です。これからも頑張りたいです。」と喜びを話しました。